

スピノザにおける国家権力と自由

『政治論』から『エチカ』を読む

柴田 健志

「人間性というものがあるべき姿ではなく、あるがままの姿で捉えるような冷静な人々のみが、自由を獲得し、維持することができる」
(ジョン・アダムズ)。

ラッセル・カーク『保守主義の精神』

はじめに

本稿の課題は『エチカ』と『政治論』というスピノザの二つの著作のあいだにあると思われる本質的な関連を指摘することにある。

例えば、それぞれの著作から以下のような論点を抜き出してみよう。

『エチカ』において、スピノザは「理性の命令」に従って生きることが「自由」であるという。「理性の命令」とは「自己の利益を求めよ」というものである。

『政治論』において、スピノザは国家権力が個々人の「権利」を現実的なものとする主張している。

一見すると無関係なこれらの主張を「力」という観点から見直すと、それらのあいだの本質的な関連が浮かび上がる。

まず、「自己の利益を求める」ということは、個物の本質である「力」

を行使することを意味している。ところが個物の「力」は自然全体の「力」に対して無に等しい。

他方、スピノザは「権利」を「力」によって規定している。つまり、個物はその「力」に応じて「権利」を持つていると考えられる。

そこで、個物の「力」は自然全体の「力」に対して無に等しいとすれば、人間は単独では無力であり、自己の「権利」を行使することができないということになる。

多数の人間の「力」が結集して国家権力を構成する限りで、人間は自己の「権利」を行使し、「自己の利益を求め」、「自由」を享受しうるのである。国家権力だけが「理性の命令」に実効性を持たせることができるのである。

このように『エチカ』と『政治論』の関係を整理してみると、『エチカ』の倫理学が『政治論』における権力の論理を暗黙に前提しているのではないかという解釈が成立するであろう。この解釈を提案するために上記の論理をテキストにもとづいて再構成したのが以下の論考である。

1 理性の命令

スピノザのいう「理性の命令(rationis dictamina)」とはどのようなものなのだろうか。『エチカ』第四部定理18の注解でスピノザは次のように述べている。

「理性は自然に反することを何も要求しないのだから、理性は各人が自己を愛すること、自己に有益なもの、自己にとって真に有益なものを

求めること、人間をより大きな完全性に導くすべてのものを欲求すること、端的にいえば自己の存在をできる限り維持するよう努めることを要求する」(Eth.IV.18.Sch.)。

「理性の命令」とは「自己の存在を維持」することである。ただし、この命令には規範的な意味は含まれていない。この点は「理性は自然に反することを何も要求しない」ということから読み取ることができるであろう。人間が「自己の存在を維持」することは自然であり、自然を超えた規範なのではない。このことはじつは「徳」についても当てはまる。

「徳とは自己の本性の法則に従って活動すること以外の何ものでもなく、また誰もが自己の本性の法則に従ってその存在を維持するよう努めるということから、徳の基礎は自己の存在を維持しようと努めることそれ自体であるということが第一に帰結する」(Eth.IV.18.Sch.)。

「自己の存在を維持」という「理性の命令」に従うということが「徳の基礎」である。つまり、「自己の存在を維持する」ことを超えた規範を身につけることが「徳」なのではない。こうしてスピノザは「理性」と同様に「徳」の概念からも規範的な意味を抜き取るのである。後に考察するスピノザの存在論から見れば、規範性を否定するようなスピノザの主張にはじつは驚くべき点はない。

驚くべきなのはむしろ次の点である。自己の存在を維持し、自分の利益を求めよというのだから、この命令は容易に実行できそうなものである。ところが、実際には「理性の命令」に完全に従うことのできる人間

など存在しないとスピノザは考えていた。スピノザが『エチカ』第四部の序文で「人間本性の型」について語っているのがその証拠である。

「人間本性の型」とは「理性の命令」のみに従うという意味で「完全」な人間の像である。後に見るように、それは「自由な人間」(Eth.IV.67.Pr.)といい換えられる。しかし、これはあくまで「型(exemplar)」であって現実の存在ではない(1)。スピノザがこのような「型」を設定する目的は、それを基準にして現実存在する人間の完全性を評価することにある。この点は『エチカ』第四部の序文で明言されていることである。

「さらに、人間がこの型により多くあるいはより少なく近づくにしたがって、人間をより完全あるいは不完全というであろう」(Eth.IV.Praef.)。

現実存在する人間は決して「完全」になることはなく、せいぜい「より完全」になりうるというにすぎない。確かに、「理性の命令」の引用文を見直すと「自己にとって真に有益なものを求めること」が「人間をより大きな完全性に導くすべてのものを欲求すること」と並列されている。人間が求めるものは「より大きな完全性」であるにすぎない。自己の存在を維持し、自己の利益を求めるということは決して容易なことではないのである。いったいなぜなのであろうか。

2 自由

「徳」に関する引用文を見直してみると、「徳とは自己の本性の法則

に従って活動すること」であるとされている。「徳」のある人間はただたんに自己の存在を維持するのではなく、「自己の本性の法則に従って」そうするのでなければならぬ。容易ではないのはこの点である。なぜなら、「人間が現実存在に固執する力には限界があり、外部の原因の力によって無限に凌駕される」(Eth.IV.3.Pr.)と考えられるので、「自己の本性の法則」あるいは「自己の本性」に従うことは事実上かなり難しいことだとされるのである。人間は巨大な自然のほんの一部にすぎないのだから。

「人間が自然の一部ではないということはありえず、また自己の本性のみによって理解され、自己がその十全な原因である変化以外のいかなる変化も受けない」ということはありえない」(Eth.IV.4.Pr.)。

人間に「自己の本性のみによって理解」されるような変化しか起こらないということはない。この点は歴然としている。「自己の本性」に従って生きることが、はじめから著しく制限されているのである。より「完全」になることが倫理的な生の課題とされるのはこの意味においてである。

このような考えは「徳」について明確に述べられている。「理性の命令」に従って「自己の存在を維持する」ことが「徳」の基礎であるという点はずでに見た。これを受けた形でより多くの「徳」ということが問題にされている。

「各人は自己に有益なものを追求すること、つまり自己の存在を維持

するように努めかつそれをなしうることが多ければ多いほど、より多く徳を備えている」(Eth.IV.20.Pr.)。

このように見てくると、「自由」についても事情は同じであることが推測されるであろう。事実はまだしくその通りである。スピノザのいう「自由な人間」とは「理性の命令にのみ従って生きる人間」(Eth.IV.67.Pr.)のことである。つまり、完全に「理性の命令」に従う人間である。そのような人間は現実には存在しない。それはあくまで「型」なのである。問題はその「型」にどれだけ近づきうるか、換言すればどれだけ「自由」になりうるかなのである。この点を明言しているテキストを『政治論』から引用しよう。

「人間がより多く理性によって導かれ、衝動を抑制しうるに従い、人間の自由はより大きくなる」(TP.2.20)。

では、人間はどうやってより大きな「自由」を享受しうるのであろうか。いや、そもそもなぜ「自由」でありうるのだろうかと問わねばならない。というのも、「自由」を享受するために各人に与えられている「力」は極めて小さいと考えられているからである。いや、それはあまりに小さすぎてほとんど無に等しいとさえ考えられるであろう。人間の「力」は「外部の原因の力によって無限に凌駕される」と考えられるのだから。この点を真剣に受けとめるなら、より大きな「自由」などという以前に、果たして人間が少しでも「自由」でありうるかどうかという点が問題になるであろう。これまでの文脈を踏まえれば、この問題は、人間が少し

でも「完全」になりうるか、あるいは少しでも「徳」を持ちうるかという形に書き換えることもできる。事実、スピノザは『政治論』において人間の「権利（自然権）」の問題としてこの点を否定的に述べている。

「人間の自然権が各人の力によって決定され、かつ各人のものでしかないあいだは無であり、現実においてよりもむしろ空想において存在する。それを享受するいかなる保証もないからである」（TP 215）。

ところが、人間は現実的に何ほどか「自然権」を行使しているように思われる。だからこそより大きな「自由」が問題になりうるのである。そこでこう問わねばならない。人間の「力」が「外部の原因の力によって無限に凌駕される」とすれば、「現実においてよりもむしろ空想において存在する」とまでいわれる「自然権」をいったいなぜ人間が現実に行使しうるのであろうか、と。

スピノザはそこに国家権力のはたらきを認めていたと考えられる。人間に「自然権」の行使を保障しているのは国家権力なのである。上記の『政治論』の引用文の後半では、多数の人間が「共同の権利」を持つ限りで「自然権」は考えられようと説かれているからだ。

「人類に固有なものである自然権は、人間が共同の権利を持ち、居住し耕作することのできる土地を持ち、自衛しかつあらゆる暴力を排除し、またすべての人間の共同の意向に従って生活することを要求しうる場合においてのみかろうじて考えられうる。というのも、より多くの人間がこのように一致してひとつになればなるほど、すべての人間がそれだけ

多くの権利を同時に持つからである」（TP 215）。

この引用文に続くテキストで、スピノザは「人間が共同の権利を持ち、すべての人間があたかもひとつの精神によってのように導かれる」（TP 216）場合を想定している。多くの人間の権利が「共同の権利」として集約されることが国家権力の設立につながるこれが「導かれる（ducuntur）」という動詞によって暗示されていると見ることがができる。そしてまさしくそれが国家権力であることをスピノザは明言するのである。

「多数者の力によって規定されるこの権利は、これまで統治権（Imperium）と呼ばれてきた」（TP 217）。

このようにテキストを再構成して明らかになることは、個々人の「権利」はそれらが「共同の権利」に集約され、国家権力を生み出すにいたってはじめて現実性を持つということである。なお、この引用文では「権利」が「力」という概念に置き換えられているが、その理由は以下で論じる。さて、以上のような解釈からひとつの推測が成り立つであろう。スピノザが『エチカ』において「自由」について語りえたのは、いや、より大きな「自由」についてすら語りえたのは、『エチカ』の倫理学が国家権力の存在を暗黙に前提して語られていたからであるという推測である。

『政治論』は『エチカ』の延長で書かれたというよりも、むしろ『エチカ』の暗黙の前提を『エチカ』から分離する形で書かれたと見ることができ

るのである。この観点から『政治論』というテキストを検討することが重要である。問題は、国家権力が「理性の命令」に実効性を持たせ、またそのことによって個々人の「権利」を保障することになる論理である。しかし、その前に以上の解釈の前提となっている「力」の概念および上記の引用文に含まれる「自然権」の概念を見ておかなければならない。これらの概念はスピノザにおいて密接な関係を持っている。なぜなら、スピノザにおいて「自然権」あるいは端的にいえば「権利」とは「力」によって規定されるものとして理解されているからである。

3 力

スピノザの形而上学において、すべてのものは「神」という「無限に多くの属性からなる実体」(EthI.6D.)の中にあると考えられている。現実存在するすべての個物は「神の属性の変容」(EthI.25Cor.)として神の中にある。「神の属性」が様々な仕方で「変容」することによって諸個物が現実には生み出されていると考えられているのである。「神の属性」と個物とのこのような関係は「表現」とも呼ばれている。個物とは「神の属性を一定の決定された仕方で表現する様態」(EthI.25Cor.)である。個物が現実存在するということは「神の属性」を「表現」することなのである。

この点を踏まえて『エチカ』における「力」の概念を考察する必要がある。考察の目的は、スピノザが個物の本質を「力」に見ているという点を示すことにある。個物が「自己の存在を維持する」という「理性の命令」の背景にはこのような個物の理解がある。いうまでもなく「自己

スピノザにおける国家権力と自由 『政治論』から『エチカ』を読む

の存在を維持する」ことは「力」を行使することにほかならない。この点は「徳」の定義からもしっかり読み取られる。「私は徳および力を同一のものと解する」(EthIV.D8)。すでに述べた通り、スピノザは「徳」を「自己の存在を維持する」ことへ還元した。ところが定義の通り「徳」とは「力」なのだから、「自己の存在を維持する」ことは「力」を行使することにほかならない。

この点を念頭に置くと、「神の属性を一定の決定された仕方で表現する」という定理25の系のフレーズが、後の定理では次のようにパラフレーズされているという点が重要になる。

「現実存在するすべてのものは神の本性あるいは本質を一定の決定された仕方で表現する (定理25の系による)」(EthI.36Dem.)。

ここで「神の属性」が「神の本性あるいは本質」とパラフレーズされているという点に注目しなければならない。この点はトリヴィアルではない。「神の本質」とは「神の力 (potentia)」(EthI.34Pr.)であると考えられるがゆえに、「神の本性あるいは本質を一定の決定された仕方で表現する」というフレーズが「神の力を一定の決定された仕方で表現する」(EthI.36Dem.)とさらにパラフレーズされているからである。一連のパラフレーズの帰結として、個物が現実存在するということは「神の力を表現」しているということなのであるという点が認識されるのである。

このような形で明確に打ち出された「力」の論理は『エチカ』第三部定理6および7における「コナトゥス」の概念に帰着している。『エチカ』第三部定理6では「各々のものはできる限り自己の存在に固執するよう

努める」(III.6.Pr.)と主張される。その証明は「個物とは神の属性を一定の決定された仕方で表現する状態である(第一部定理25による)、すなわち(第一部定理34による)神が存在し活動する神の力を一定の決定された仕方で表現するものである」(III.6.Dem.)ということを根拠になされているのである。

また定理6に現れる「自己の存在に固執する(perseverare)よう努める」というフレーズは、「理性の命令」における「自己の存在を維持する(conservare)よう努める」(Eth.IV.18.Sch.)というフレーズに書き換えられている点がここで指摘できるであろう。動詞が違うが、それらの意味にはほとんど違いがない。

さらに『エチカ』第三部定理7では「各々のものが自己の存在に固執するよう努めるコナトゥスはそのものの現実的本質にほかならない」(III.7.Pr.)と主張されている。スピノザが個物の「コナトゥス」が個物の「(現実的)本質」にほかならないと主張する理由は明らかである。「神の本質」とは「神の力(potentia)」であり、個物は「神の力」を「表現」しているのだから、個物の「力」の行使そのものである「コナトゥス」が個物の「本質」であることは当然なのである。

4 権利

スピノザは以上のような「力」の形而上学の延長で「権利」の概念を規定している。スピノザの「権利」の概念は、「すべての人間に同等の権利を認める」というような抽象的なものではない。換言すれば、「徳」と同様に規範的な概念ではない。スピノザの「権利」の概念は個物の現

実的な「力」とは無関係に個物に帰属するようなものとして考えられていないからである。

この点を主張するために、スピノザは「神の権利」についての言及から始める。神の「権利」とは神の「力」にほかならない。とすれば、個物は「神の力」を「一定の決定された仕方で表現する」ものであるというのだから、個物の「権利」とは個物において表現された神の「力」にほかならない。

「このことから、すなわち自然物をして現実存在し作用するようにさせる力とはまさしく神の力そのものであるということから、我々は自然権とは何かということ容易に理解する。というのも、神はすべてのものに対して権利を持ち、神の権利とは絶対に自由なものとして考えられる限りにおける神の力そのものにほかならないがゆえに、各々の自然物は現実存在し作用することに対して力を持っているのと同じだけの権利を自然によって持っているということがここから帰結するからである」(TP.23)。

このように、個物の「権利」はその「力」に即して考えられている。それゆえ、すでに見た通り、「人間の自然権が各人の力によって決定され、かつ各人のものでしかないあいだは無」であるという『政治論』の認識は、人間の「力」は「外部の原因の力によって無限に凌駕される」という『エチカ』の認識にすでに含まれているとみなすことができるのである。

ところで、「神の力」の表現である「自然権」は「自然の諸法則あるいは諸規則」として理解されている。

「私は自然権ということで、すべてのことがそれに従って生じるところの自然の諸法則あるいは諸規則そのものと解する、すなわち自然の力そのものと解する」(TP 24)。

例えば、机に歩く「権利」がないように、人間には鳥のように飛ぶ「権利」はない。各々の個物は、その「権利」を行使する際に「諸規則」に従っているというのはこのようなことを意味している。個物の「自然権」とは「自然の諸法則あるいは諸規則」のことであり、またそのような仕方では「表現」される「自然の力」のことなのである。なお、「神の力」がここでは「自然の力」と書き換えられている。以上の論理をスピノザは次のようにまとめる。

「各々の人間が自己の本性の諸法則に従ってなすことを、各々の人間は最高の自然権によってなすのであり、また各々の人間はその力に相当するだけの権利を自然の中で持っているのである」(TP 24)。

この引用文に含まれる「各々の人間が自己の本性の諸法則に従ってなすことを、各々の人間は最高の自然権によってなす」というフレーズは、ほぼ同じ形で『エチカ』第四部定理37の注解2に現れている。「各人は最高の自然権によって現実存在しており、したがって各人は自己の本性の必然性から帰結することを最高の自然権によって行う」(Eth IV 37, Sch 2)。また、「自己」の本性の諸法則に従った」というフレーズも「徳の基礎」について述べた『エチカ』第四部のテキストですでにこのまま

スピノザにおける国家権力と自由 『政治論』から『エチカ』を読む

の形で使用されている。したがって、この認識もまた『エチカ』の中にすでに含まれていたとみなしてよいであろう。

ただし、『エチカ』においてスピノザはそのような「権利」が現実的に行使される条件としての国家権力に言及してはいるのだが (Cf. Eth IV 37, Sch 2) 、その内的論理についてはごく表面的にしか考察していない。その課題は『政治論』に持ち越されたと考えられるのである。

以上を踏まえ、国家権力が「理性の命令」に実効性を持たせ、またそのことによって個々人の「権利」を保障することになる論理の考察に移ろう。

5 国家権力

「人間が現実存在に固執する力には限界があり、外部の原因の力によって無限に凌駕される」という定理から、人間の「力」の現実的なものは「外部の力」との関係によって規定されるという認識を読みとることができる。「外部の力」からはたらしきを受ける限り、個々の人間の「力」は「無限に凌駕」され続けるであろう。しかしながら、人間の「力」と「外部の力」との関係はこのようなものだけとは限らない。なぜなら、我々の外部には「我々の本性とまったく一致するもの」(Eth IV 18 Sch) が存在するからである。それは人間のことである。二人の人間の「力」は、それらが対立せず一致する場合においては、それぞれの人間が持つ「力」よりも大きいものであることは自明である。

「というのも、例えばまったく同じ本性の二つの個体が相互に結合す

れば、それらは単体の個体よりも二倍の力を持つ個体を構成するからである。それゆえに、人間にとって人間よりも有益なものはない。」(Eth. IV.18Sch.)。

こうしてより多くの人間が相互に結合することによって、それらから構成される「力」が十分に大きなものとなれば、個々人の「力」もその一部分を構成するものとして考えられ、もはや「外部の原因の力によって無限に凌駕される」ことはないであろう。つまり、その「力」は現実的なものとして考えられるであろう。

とはいえ、複数の人間が実際にひとつの個体になることはない。そこで、この引用文の趣旨は以下のように理解することができる。本性が一致することとは、その存在を維持するために求めるものが一致するということである。すなわち、ある人間にとって有益なものは他の人間にとっても有益なものでありうる。すると、多くの人間が相互に結合することとは、「すべての人間がすべての人間に共通して有益であるものを求める」(Eth. IV.18Sch.) ことであると解することができる。その中でなら、個々の人間はその「力」を行使しうるであろう。とすれば、「自己の利益を求めよ」という「理性の命令」は、現実的には「すべての人間に共通して有益であるものを求めよ」となる。その限りで、各人は「自己の利益を求める」ことができるからである。

これが『エチカ』の認識である。『政治論』はこの認識を「権利」の概念で表現している。すなわち、すでに言及したように、多数の人間が「共同の権利」を持つ限りで個々人の「権利」が現実的に考えられるのだ、と。ところで、多数の人間の「権利」すなわち「力」が一体となって構

成される「共同の権利」が「統治権」であり、またそのような権利を持つのが「国家」にほかならない。

『政治論』における「国家」についての論理は、「理性の命令」に関わってくる。「理性の命令」はすべての人間の利益になることである。それなら、誰が命じてもよいはずである。ところが現実にはそうではない。人間が単独で発する命令は多数の者に対する強制力を持ちえないからである。人間は「理性の命令」が国家権力によって命じられるときにのみ、それに従いうるのである。国家権力の存在理由はここにあるというのが『政治論』において語られる認識である。ではなぜ国家権力の発する命令だけが実効性を持ちうると考えられるのであろうか。

ひとことで表現すれば、「権利」が「力」によって規定されていると考えられるからである。スピノザのいう「統治権」とは「多数者の力によって規定される権利」(TP21N)であり、その限りにおいて「国家」の命令は強制力を持つ。「国家」の持つ「力」は個々人の持つ「力」よりもはるかに強力だからである。任意の人間の命令によってすべての人間を従わせることはできないが、「国家」の命令ならばそれができるのはこのような理由による。この点をスピノザは次のように説明している。

「各々の国民(civis)ないし臣民は、国家(civitas)そのものが彼よりも力を持っているその分だけ、より少ない権利を持つことになる。したがって、各々の国民は、国家の共同の決定によって要求しうることを除いて、いかなることもなしえないし、また所有しえない」(TP32)。

「国家」の下にある個々人の「権利」は、「国家」の「力」に比較し

て少ない。だからこそ「国家」の命令は強制力を持つのである。こうしてスピノザは「義務」というような規範的概念に訴えることなしに、国民が国家の命令に従う論理を説明するのである。

ところで、この引用文は「国家」の命令に従うと、その分だけ個人の「権利」が少なくなると主張しているように見える。はたしてそうなのであろうか。換言すれば、「国家」の下では人間の「自由」が制約されるということなのだろうか。

必ずしもそういうことにはならないであろう。確かに、引用文では「各々の国民は・・・より少ない権利を持つ」といわれている。しかし、それは「国家」の力に比較して「より少ない」ということであって、個人の「権利」それ自体が縮小するということではない。この点については、「各人の自然権は（事態を正しく吟味すれば）国家状態において終息しない」（TP 33）とスピノザ自身が明言している。また書簡においても、スピノザはまさしくこの点に「自分とホッブスとの違い」（Ep. 238239）があると認めている。「国家」の設立において個々人はその「権利」を譲渡したわけではないからである。譲渡したのではなく、「力」としての「権利」を結集したのである（2）。

これとは逆に、個々人に対して「国家」がその強制力を放棄したとすれば、もはや「国家」の存在理由はなくなり、個々人は「国家」の下で享受しうる「自由」を失うであろう。

「もし国家が誰かに対して自己の意向にしたがって生活する権利を、したがってまた力（potestas）を認めるとすれば、そのこと自体によって国家はその権利を放棄し、国家がそのような力を与えた人にその権利

を譲渡することになる。・・・もし国家が各々の国民にこの力を与えたとすれば、そのこと自体によって国家は崩壊し、すべては自然状態に帰することになる」（TP 33）。

引用文の最後に現れる「すべては自然状態に帰する」というフレーズが重要である。個々人の「力」が国家権力に集約されず、分散して存在する場合は「自然状態」である。そこでは個々人の「権利」は無に等しい。それは結局、個々人が実質的に「自由」を失うということを意味している（3）。

ところで、引用文に現れる「力（potestas）」は、「多数者の力」という場合の「力（potentia）」とは異なる。前者は、相手を物理的に拘束する、心理的に恐怖を与える等の方法によって「他者を自己の力（potestas）の下に置く」（TP 210）という形で用いられる。それは強制力という意味での「力」である。各々の人間にこのような「力」を認めるとすれば、ホッブスのいう「万人の万人に対する戦い」が帰結するであろう。「すべては自然状態に帰する」というとき、スピノザもこのことを考えている。つまり「力（potestas）」とは人間が相互に対立するような関係にある場合の「権利」である。逆に人間が相互に一致するような関係にある場合には、各々の人間は「力（potentia）」としての「権利」は保持しつつ、国家のみが「力（potestas）」としての「権利」を独占することになる（4）。

「各々の国民は自己の権利の下ではなく、国家の権利の下にあり、国家のあらゆる命令を実行するよう拘束される」（TP 34）。

この引用文に読まれる「権利」とは強制力として見られた「権利」にほかならない。「統治権」すなわち国家権力とはもともと「多数者の力 (potentia)」によって規定されるものであるが、それがいったん設立されると多数者の各々に対して強制力 (potestas) を持つようになると考えられるのである。

国家権力がこのような強制力を持つことによって「自然状態」が回避される。実際、このような強制力を持たなければ、国家は国民に対して「国家のあらゆる命令を実行させる」ことはできないであろう。そのような強制力について『エチカ』はこう説明している。

「共通の生活規則を定め、法を制定し、また感情を抑制しえない理性によってではなく威嚇によって法を保障する力 (potestas)」 (Eth. IV.37, Sch.2)。

国家権力は「理性の命令」を実現するような「法」を制定することができる。しかし、それだけでは不十分である。国家権力は「法」を制定するだけでなく、実施しなければならない。ところが、国民すべてが「法」を遵守するとは限らない。つまり、「理性の命令」に自発的に従うとは限らない。なぜなら、多くの人間は理性によってではなく感情によって導かれるからである。スピノザは『エチカ』の「コナトゥス」の論理を踏まえて『政治論』では次のように述べている。

「各々のものはできる限り自己の存在を維持するよう努めているのだから、もし理性の教えに従って生きることが盲目的欲望によって導かれ

ることと同様に我々の力のうちにあるとしたら、すべての人間が理性によって導かれ、賢明に生活したであろうことは疑いえない。ところが実際は少しもそうではない」 (TP26)。

それゆえ、国家権力に国民を強制する力がなければ、いくら「理性の命令」を命じようが空疎である。この意味において、国家権力にとって強制力 (potestas) は本質的なものである。

しかしそれなら、国家権力は国民に対していかなる命令をもなしうるということにならないであろうか。換言すれば、「理性の命令」を実効性のあるものとして命じることができるのは国家権力であるとしても、国家権力が国民に対して実際に命じるものが「理性の命令」であるとは限らないのではなからうか。最悪の場合には、国家権力は恣意的な「法」によって国民を弾圧し、国民から「自由」を奪い去ることもできるということにならないであろうか。

この点に関して、国家権力といえども国民に対して理不尽な命令をなしうるというわけではないと、スピノザは主張している。「理性の命令」を命じなければ国家権力そのものが内的に崩壊してしまうからである。ではなぜそうに考えられるのか。これが最後の論点である。

6 国家の権利

「理性の命令」とは「自己の存在を維持せよ」ということであり、この意味において「自己の利益を求めよ」ということである。ところが人間は単独でこの命令を実行することはできない。むしろ多くの人間が「共

同の権利」を持つ限りにおいてこの命令は現実的なものとなるのである。したがって実際にはその命令は「すべての人間に共通して有益であるものを求めよ」というものになる。それを命じることができなのが「多数者の力」によって規定される国家権力にはかならない。

問題は国家権力にとって「理性の命令」を命じることが不可避であると考えられる理由はどのようなものかという点である。この問いかけに答えるために参照しなければならないことは、やはり「国家の権利は多数者の力によって規定される」という論理である。国家権力がすべての人間に対して命じる権利を持つ理由はここにある。ところが、国家権力が「理性の命令」を命じるよう拘束される理由もまたここにある。

『エチカ』においても『政治論』においても繰り返し返されているように、人間は「自己の存在を維持しようと努める」。換言すれば「自己の利益を求める」。このことは、人間が理性によって導かれようと感情によって導かれよう同じである。そこでもし、国家権力がこれに反することを命じたとすればどうなるであろうか。そのような場合には、「国家の権利」そのものが考えられないとスピノザは述べている。

「国家の権利はあたかもひとつの精神によって導かれる多数者の力によって決定される。ところが、このような精神の一致は、健全な理性がすべての人間にとって有益であると教えるものを国家が最大限に意図しているのではないかにしても考えられない」(TP 37)。

というのも、国家権力が「理性の命令」に反した場合、理性によって導かれる人間のみならず、感情によって導かれる人間にとってさえ「自

スピノザにおける国家権力と自由 『政治論』から『エチカ』を読む

己の利益を求める」ことが危うくなり、したがってそれに対してはほとんどすべての人間から反撥が起こることは必至だからである。しかし、大多数の国民が国家権力の命令に反撥するということは、「国家の権利」を規定している「多数者の力」そのものがはやひとつにまとまらないということの意味している。そこには「精神の一致」はすでにない。彼らはもはや国家の命令に従わないのだから「自然状態」にあるといつてよいだろう。このことは「国家の権利」そのものが解体することを意味している。この意味において、「報酬あるいは威嚇によって誰もそれをなすようにさせることができないすべてのことは、国家の権利には属さない」(TP 38)、あるいはまた「大半の人を憤慨させるようなことは国家の権利には属さない」(TP 39)と主張されているのである。

このように、「国民」が国家権力の命令に従うよう拘束されるとすれば、「国家」もまた同様に万人の利益になることを命じるように拘束される。

「国家(imperium)は必然的に、統治する人間、統治される人間すべてが、欲すると欲せざるとにかかわらず、公共の福祉に関することをなすように、すなわちすべての人間が自発的か強制的か必然的かいずれにせよ理性の命令に従って生活できるように、組織されなければならない」(TP 63)。

もしそうしなければ「国家」そのものが不安定となり、その権利を減じるであろう。「国民」に「権利」あるいは「自由」を保障できない国家権力は自らの存在基盤を失うからである。

おわりに

各人が「権利」を行使すること。これを保障することが国家権力の役割である。各人に対して「権利」の行使を保障することとは、「自由」を保障することである。この意味において、『神学・政治論』では「国家の目的はじつのところ自由である」(TTP XX 227)と主張されるのである。それゆえ、政治の問題と切り離して「自由」を論じることはいかなる。倫理学は政治論を前提しなければ語れないのである(5)。これが結論である。

誤解してはならないことは、理性によって導かれる人間だけが「自由」であるわけではないという点である。理性によって導かれる人間は、感情によって導かれる人間よりも「より自由」であるというにすぎない(6)。人間は自己の「権利」を行使する限りにおいて「自由」である。この意味での「自由」を保障しているのが国家権力にはかならない(7)。ただし、理性によって導かれる人間と感情によって導かれる人間との間には一点だけ違いがある。「国家」が「理性の命令」を命じるよう拘束されている限りにおいて、理性によって導かれる人間にとっては自己自身に従うことがそのまま「国家」に従うことになるからである。したがって、理性によって導かれる人間は躊躇なく「国家」の命令に従うことになるであろう。この認識は『政治論』において次のような形で述べられている。

「人間はより多く理性によって導かれるほど、すなわちより多く自由であるほど、より確固として国家の法を遵守し、また自分がその臣民で

ある最高権力の命令を実行する」(TTP 36)。

「理性によって導かれる」ということは、「自己の利益」よりもむしろ「すべての人間にとって共通の利益」を求めることである。ところでこれまで見てきたとおり、「すべての人間にとって共通の利益を求めよ」ということを命じられるのは国家権力のみである。それゆえ、人間が「理性によって導かれ」、「自由」であればあるほど、その行為は国家権力の命令に一致するであろう。

これとまったく同じ認識が、すでに『エチカ』においてより簡潔な形で述べられているという点に注目しなければならない。

「理性に導かれる人間は、自己にのみ服従する孤独においてよりも、共同の決定に従って生活する国家において、より自由である」(Eth IV.73Pr.)。

多くの国民が国家の命令に従って生活している限りにおいて、彼らの精神は一致しているとみなしうる。つまり、その限りにおいて無用の対立が避けられている。それゆえ、「理性に導かれる人間」もまた国家の中では対立に巻き込まれぬよう孤独を貫く必要がなく、その意味で「より自由」であると考えられるのである。

凡例

スピノザの著作は以下の略号によって表記する。

『神学政治論』 TTP, Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera III*

参照テキストは章をローマ数字で表示し、全集のページ数をアラビア数字で表示する。

『政治論』 TP, Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera III*

参照テキストは章および節とともにアラビア数字で表記する。

『エチカ』 Eth. Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera II*

参照テキストはローマ数字で各部を示し、定義等は以下の略号とアラビア数字で表記する。

序文：Prf. 定義：D. 公理：Ax. 定理：Pr. 証明：Dem. 系：Cor. 注解：Sch.

『書簡集』 Ep. Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera IV*

参照テキストは全集のページ数で表示する。

注

- (1) スピノザのいう「人間本性の型」あるいは「自由な人間」がある種の理想であるという点について何人かの論者の意見が一致している。「厳密にいえば、スピノザの体系においてこのような人間は存在しえない」(Sleigh Jr.: Chappell, Della Rocca 1998: 1232)。「自由な人間が意味することは制限のない理性の行使ということであるが、それはただ表象としての現実性を持った理想の存在であるにすぎない」(Hübner 2014: 140)。「自由な人間はある種の人間的理想を表現している」(Nadler 2006: 231)。
- (2) これに対し、『神学・政治論』においてスピノザは「権利の譲渡」による国家権力の設立を語っている。ただし、スピノザはそこで「各人は自分がその一部分である社会全体の多数者に権利を譲渡する」(TTP XVI 181)という表現を用いているという点に注意すべきである。権利が譲渡される先に

スピノザにおける国家権力と自由『政治論』から「エチカ」を読む

- 自分自身が含まれているのである。つまり、各人は多数者の権利の複合体の一部分でしかないがゆえにその行動を制限されるのであって、行動する力すなわち権利そのものを放棄したのではない。実際、『神学・政治論』第十七章の冒頭では「誰も最高権力に全てを譲渡することができない」と、またそれは必要ではないことが示される」(TTP XVII 187)と謳われている。ロックに代表されるリベラリズムの政治思想においては、国家権力は個人の「自由」を制限するものとして考えられる。スピノザの政治思想は本質的にこのような考えと相容れないものである。「スピノザの政治思想において、自由はリベラリズムとは異なった役割を果たしている」(Kisner 2012: 766)。リベラリズムにおける「自由」が規範的概念であるのに対して、スピノザにおける「自由」は「力」の行使という現実的概念だからである。
- (4) 「スピノザは実際に *se iuris* (自己の権利の権利の下にある)」という用語を二つの違った意味で用いており、それらは二つの異なった力の概念に対応している」(Steinberg 2008: 244)。すなわち「力 (*potentia*) と同一の拡がりを持つ権利は本質的なものであって譲渡できない。しかし力 (*potestas*) としての権利は譲渡することができ、単一の権威に統一されることができ、それが統治者すなわち最高権力である」(Steinberg 2018: 181)。この解釈を踏まえると次の解釈が成立する。「たとえ人間が自己の力 (*potentia*) を他の者に譲渡することはできないとしても、他の者の力 (*potestas*) の下にあることは避けられない」(Steinberg & Viljanen 2021: 127)。
- (5) この点に関して「スピノザの政治的著作をスピノザのより大きな倫理的企ての延長線上にあるものとして見る」(Steinberg 2009: 35)という解釈があるが、本稿の立場はこれと正反対である。
- (6) 「自由」について現実的に考察するには、それを「度合」(Sleigh Jr.:

Chappell, Della Rocca 1998 : 1231) の問題としてとらえることが重要である。注 (一) で触れた「理想」としての「人間本性の型」あるいは「自由な人間」の「自由」はその極限としての意味を持つ。

- (7) スピノザの政治論においては国家権力と個人の「自由」あるいは「権利」は対立関係に置かれていない。個人の「自由」ないし「権利」を保障するのが国家権力であると考えられるからである。この点において、個人の「自由」ないし「権利」を国家権力の介入から守るというリベリズムの視点とは正反対の視点をスピノザの政治論の中に読み取ることができる。個人の「自由」ないし「権利」を毀損する要因はむしろ人間自身の内にある。「理性」よりもむしろ「感情」に従うということがスピノザのいう「人間の隷属」なのである。「感情を緩和し抑制することにおける人間の無能力を私は隷属と呼ぶ」(Eth.IV.Pr1)。したがって、倫理学固有の課題とは「隷属」を克服してより大きな「自由」と「徳」を求めることにある。国家権力はその障害とはみなされず、むしろ倫理的課題を遂行するための条件とみなされる。「国民は国家の後援を受けることで彼らの自由と徳をより大きなものにする機会を得ている。自由と徳をより大きなものにするとは、スピノザにとっては理性に従って生きること、諸感情に対してより大きな支配を勝ち取ることに等しい」(Nadler 2011 : 197)。

文献

- Hübner, Karolina 2014, "Politics and Ethics in Spinoza : The problem of Normativity", *Essays on Spinoza's Ethical Theory*, ed. by Matthew J. Kisner & Andrew Youpa, Oxford
- Kisner, Matthew J. 2012, "Spinoza's Liberalism", *Philosophy Compass*, 7/11, 782-

733

- Nadler, Steven 2006, *Spinoza's Ethics An Introduction*, Cambridge
- Nadler, Steven 2011, *A Book Forged in Hell Spinoza's Scandalous Treatise and The Birth of The Secular Age*, Princeton
- Sleigh Jr., Robert, Chappell, Vere, Della Rocca, Michael 1998, "Determinism and Human Freedom", *The Cambridge History of Seventeenth Century Philosophy*, vol.2, ed. by Daniel Garber & Michael Ayers, Cambridge
- Steinberg, Justin 2008, "Spinoza on Being *Sui Iuris* and The Republican Conception of Liberty", *History of European Ideas*, 34, 239-249
- Steinberg, Justin 2009, "Spinoza on Civil Liberation", *Journal of The History of Philosophy*, 47/1, 35-58
- Steinberg, Justin 2018, "Spinoza and Political Absolutism", *Spinoza's Political Treatise A Critical Guide*, ed. By Yitzhak Y. Melamed & Hasan Sharp, Cambridge
- Steinberg, Justin & Viljanen, Valtteri 2021, *Spinoza*, Polity Press